

# 国際プログラムの非公式モデルとしての ESS (English Speaking Society)

ESS (English Speaking Society) as an Unofficial Model for International Programs

大学院言語文化研究院 井上奈良彦

Faculty of Languages & Cultures Narahiko INOUE

## Abstract :

This article tries to explore a possibility of setting up an international liberal arts program (or its part) based on a model from a popular extracurricular program in Japan called ESS (English Speaking Society) based mainly on the author's own experiences in some ESSs as a student and then as an advisor. After characterizing an ESS as an intellectually challenging program which compliments the traditional Japanese university education, the author details its forensic activities especially debate. Based on such activities, a brief outline of a partial curriculum is proposed for international programs in order to develop students' argumentation skills (research, analysis, and rhetorical communication). As an addendum, unsolved problems are raised in relation to English Hegemony / Imperialism, which is unavoidable in such English-medium programs.

キーワード：国際プログラム，教養教育，ESS，課外活動との協同，英語コミュニケーション，ディベート

Keywords: International Program, Liberal Arts Education, English Speaking Society, Co-Curricular Activities, English Communication, Debate

## 1. はじめに

国際教養学部というような学部や学科（以下IP—International Programと表記）が日本のいろいろな大学で構想されたり既に設立されたりしています。そのカリキュラムを具体的に想定するモデルとして、九州大学の学際課程「21世紀プログラム」やJTW（Japan in Today's World）および他大学の国際教養学部などが考えられますが、もう一つの具体的イメージとしてESS（English Speaking Society）と呼ばれる英語クラブの活動を参考にすることができます。

ESSは「英会話」の練習をする同好会的な気軽な文化サークルという印象を持つ方も多いと思いますが、多くの大学ESSは体育会系運動部のようなコミットメントを求める知的活動団体という性格があります。特に、私の学生時代（1976～1980年、京都大学）においては、大学生の知的欲求を満たすという点で正規の大学授業を補っていたと言えるでしょう。教養部の授業の多くは講義形式で学生の参加も求められず、学生の知的欲求を満たしていませんでした。多くの大学の教養課程において同じような状況があったと思います。ESSの活動はある意味で現在の大学の少人数の学生参加型教育を課外活動という枠組みの中で学生自身が先輩から後輩へ提供していたと言えるでしょう。その後、大学が正規の授業科目として学生の知的欲求を満たす授業を開くにつれて、ESSの活動が衰退しているようにも思われます。衰退の原因にはまた、学生が体育会系のコミットメントを求めるようなクラブ活動を敬遠したり、英語教育も学内外でコミュニケーションを重視したクラス

が学生に容易に提供されたり、というような他の要因もあります。

英語によるリベラルアーツ（教養）教育といったものを提供するIPのカリキュラムにESSの活動形態は参考にできる部分も多いと思います。以下、私の体験を中心にESSの活動概要を紹介し、それに基づいてIPにおいて利用可能なカリキュラム案の一部を簡単に示します。最後に補章として、英語使用を前提とした活動と英語覇権主義の関係について若干の問題提起をします。なお、九州大学の現在のESSはここで紹介するような硬派の活動と気軽に楽しめる「英会話サークル」の間で揺れている状態かと思います。九州大学の今、という文脈において、ESSがどうあるべきかという問いに必ずしも単純な答はないでしょう。<sup>1</sup>

## 2. 高校（のESS）から大学（のESS）へ

私は高校時代にもESSに入っていました。そこでは、有名なスピーチの暗誦、短い英語劇の上演などを節目の活動とし、日常的には英語総合教材によるリスニングやスピーキングを中心とした活動でした。英語力向上にある程度の効果はあったと思いますが、大学に入って、ESSでさらに英語運用能力が向上することをさほど期待していませんでした。ESSに入ったのは、どちらかという友達を作ったり、先輩から科目選択のための情報などを期待したり、というところでしょう。

私が大学受験に際し京都大学文学部を選んだ理由の一つは、入学時に狭い学科や専攻を選択しなくてもいいということでした。私自身は言語学や心理学をやってみたいなという漠然とした希望があったとともに、親は文系なら就職を考えて法学部か、文学部なら英語教師にでもなれる英文科がいいのでは、というような考えでした。そこで、京都大学文学部は入学時には学科や専攻に分かれず、入学後に選択できるということが魅力の一つでした。

1976年当時の京都大学では、多くの単位を授業に出ずに「もらう」ことができ、好きな活動に打ち込めるという状況でした。まだ学生運動がかなり残っていて、授業は学生のストなどにより開かれないこともあり、また、教養部の授業の一部は、カレーの作り方をレポートに書けば「優」がもらえるという〇〇学や、レポートを窓から投げて遠くに飛んだ順に成績がつけられると噂される□□学が開講され、大教室での講義は出席を取ることもしなかったと思います。さらに1、2年次に配当される文学部の授業や教職科目も「おおらか」なものも多く、履修登録をしていない教育原理の定期試験を受けると、どこからか解答が回ってきて、成績一覧表には科目名と「優」が掲載されていました。一方、もともと出席していた別の教育原理の授業は「良」でした。文学部の心理学の講義では教授が、ずっと黒板に向かってぼそぼそとプラナリアの反射の話をしているのですっかり興味を失ってしまいました。この科目はレポートを出しましたが「不可」でした。一方、教授の顔を見たこともなく、定期試験がスト（学費値上げ反対か成田空港三里塚闘争支援か）によって中止になり、掲示板に張り出されたレポート題目を見て事務室に提出した△△学は単位がもらえました。

このような状況のなかで、教養部の授業は語学と体育だけ出席するという状態に近くなり、専門の科目も専攻を英文学と決めた後は他の専門科目には出席もせず、みなレポートを書いて「認定」してもらったようなものでした。それによって空いた時間のほとんどをESSの活動に費やしていま

<sup>1</sup> 私は現在、九大ESSの顧問教員でもあります。求められれば助言はしますが、その活動方針に介入して一定の方向に指導することは避けています。

した。というより, ESSの活動にのめりこむ中で授業は最低限しか出なくなったというのが実情だったのでしょう。あるとき英文科の授業に出ると, 同級生から, 「あら, 井上君, 英文だったの?」と言われたことがあります。

英語教育に関しては比較的先進的な科目も開講されていて, いわゆる文学作品の訳読だけではない教育も受けることができました。<sup>2</sup>これは評価したいと思います。LL教室を使った英語発音矯正を中心とした授業, 英文を読む際に短いまとまりごとに目を動かす訓練をしたりする速読の授業, などがありました。英文科では英語論文の書き方の授業もあったのですが, これは受講せずに損をしたと思っています。卒業論文を書く際には, ESSで学んだディベートのスピーチの書き方がある程度役に立ったというか, それしか参考にできるものがなかったのです。(アメリカ現代語学会 MLAのスタイルシートはあり, 卒論ではその書式に厳密に従うように指導を受けました。)

### 3. ESSの活動内容

前節で述べたような背景の下でESSは機能してきました。一般的に大学の活動内容の充実したESSの場合, 大きく分けると, (1) 基礎的な口語訓練, (2) 楽しみながらできるようなコミュニケーション活動, (3) 討論・演劇活動(スピーチ活動)をすべて行います。以下, それぞれ説明していきます。

#### 3.1. 口頭訓練

京都大学ESSの場合, 昼休みに毎日, 『アメリカ口語教本』(クラーク, 1973他)という教材を用いて, 上級生が教師役となり, 3~4人のグループで会話の暗記や口頭での文型練習を行いました。いわゆるパターン・プラクティスですが, それまで文法訳読式の学習方法で知識として覚え, 英語を解読してきた者が, そのような知識を自動化しスキルとして身につける基礎訓練を徹底していたと言えるでしょう。また, ニュースなどのリスニングや書き取りなどの活動もこの範疇に入るでしょう。これは, 週3回の放課後の活動の一部を当てていたように思います。センター試験のリスニングどころか, 「大学入試共通試験」導入前後の話ですから, リスニングの強化も正課の英語教育を補完する意味があったでしょう。

#### 3.2. 「楽しい」コミュニケーション活動

楽しいかどうかは個人差がありますが, 歌やゲームなどの活動がここに入るでしょう(私は歌が苦手です)。少人数での日常的な話題についてのGroup Discussionや寸劇などもあり, 次の討論・演劇活動との橋渡しをするものとして行われる性格もあるでしょう。ここでも, 訳読式の授業が多かった正課の英語授業を補完していたと言えます。また, 無料の英会話学校という役割もあったでしょう。現在のように多くの学生が英会話クラスに通ったり, 「ダブルスクール」と称して専門学校に通ったり, というようなことはなかったでしょう。ESSが無料の英会話クラスとして英会話ブームと結びついていたことは, 1964年の東京オリンピックや1970年の大阪万博というような時期にESSの部

<sup>2</sup> 文学作品を用いた授業も魅力的なものがありました。同じ1年生の英語クラスの何人もがアメリカ文学専攻に進んだのは, ある教授の授業の影響も強かったのではないかと思います。一方で, 専門の授業でも, 自分の出版予定の原稿と思われるものを, 句読点まで読み上げて学生に書き取るように指示する教授もいました。

員は激増したことからわかります。

### 3.3. 討論・演劇活動（スピーチ活動）

京都大学ESSでは、放課後週2，3回、全員が小グループに分かれて、暗誦、スピーチ、ディスカッション、ディベート、寸劇などの活動を行います。そこから学内外の大会に出場を目指して練習をします。さらに放課後大会参加者だけが追加の練習をしたり、全員が参加を求められる宿泊合宿を行ったりします。多くの大学のESSにおいては、このような活動はセクションと呼ばれるグループでそれぞれの活動を行うことが多くあります。また、大規模なESS（4年生までの部員数100人を超え、一時は1000人に達するようなESSもあったと聞きます）では、活動内容毎のセクションとともに、ESSの中のミニESSとも呼べるグループという単位に分れて活動を行っていたようです。

## 4. 討論・演劇活動の詳細

IPの非公式モデルとしてESSではどの程度の活動をするのかということを説明します。特にディベートについて詳述することにします。多くの活動は、アメリカでEnglish Departmentから20世紀前半に別れてSpeech Departmentというものが成立し（Benson, 1985）そこでSpeech（Communication）活動として行われているものが基礎になっています。<sup>3</sup>

### 4.1. 暗誦（Recitation）

Speech Communication学の専門分野ではOral Interpretation（近江, 1996）と呼ばれ、声の調子などでどのように感情表現をするか、作品の解釈を示すか、という活動です。ESSでは有名人のスピーチなどを覚えて発音矯正をするとともに、暗誦大会がクラブ内部や学外の大会として開催されます。

### 4.2. スピーチ（Public Speaking）

オリジナルの内容の原稿を作り、暗記して発表します。コンテストでは、原稿とテープによる予選を行い、本選では暗記による発表と質疑応答を行います。内容、構成、英語、デリバリー（声やジェスチャーなど）、といった観点から採点が行われます。内容は主に問題解決型の聴衆説得を目的するものが多いです。資料の調査などを少ししますが、実際のスピーチでは簡単な例や逸話の紹介などが根拠となるものが中心です。学生ESSとは別ですが、Toastmaster's Internationalという組織では世界大会まであり、日本各地にもクラブがあります。アメリカの学生スピーチ大会の場合、説得型スピーチでは証拠の引用なども行われ論文発表に近いものになります。また、ユーモアを中心としたスピーチなどの大会もあります。

---

<sup>3</sup> この中でも、重点の置き方は多様としても、問題を調べ分析し、得られた答えを発表し擁護していくような過程を、一般的に「議論法」（Argumentation）と呼ぶこともできます（ジグミューラー・ケイ（2006）参照）。本稿ではスピーチ、ディスカッション、ディベートが相当します。ESSにおけるディベートについてはInoue（1994）、スピーチについては三熊（2003）を参照。

#### 4.3. ディスカッション (Group Discussion)

司会者 (Chair, Discussion Leader) がいて問題解決や合意形成を目指した少人数の討議です。クラブ内で行うとともに、他大学との交流、採点形式のディスカッション大会もあります。内容は比較的日常的なものから、社会問題を扱うものまであります。たとえば、エネルギー問題という広いテーマを設定して、いくつかの討議項目を設定しておき (現状のエネルギー消費状況、資源量、代替エネルギーの比較、政策的支援策、など)、各参加者はFirst OpinionやIce-breaker Speechと呼ばれる短いスピーチ (ペーパー) を発表し、それに基づいて質疑や討議を行い、司会者が一定方向に議論を導いていきます。

準備段階では、場合によっては数週間にわたって資料調査を行い、スピーチの原稿を用意し、同じテーマで何度もディスカッションを行います。クラブ内、近隣の大学との交流会、地区大会、全国大会などに出場するなどします。大会では、シーズンの共通テーマがESSの連盟によって決められていたり、大会独自のテーマを設定したりします。<sup>4</sup>

#### 4.4. デイバート (Debate)

現在の大学ESSでは、イギリス系の即興型デイバート (Parliamentary Debate) とアメリカ系の資料準備型デイバート (Academic Debate, Policy Debate)<sup>5</sup> が、デイバート大会の二大潮流になっています。それぞれ、日本のESSにおける呼称に従って、前者を「パーラ」と、後者を「アカデミック」と呼ぶことにします。現在世界的には、英語によるデイバート大会の主流はパーラであり、日本のチームも一部アジア大会や世界大会に出場していますが、あまり良い成績は上げていません。IPでチームを作って上位進出を狙うことも可能でしょう。これは学生の動機付けになるとともに、プログラムの対外的な宣伝効果も大きいでしょう。

一方、「アカデミック」は、私の学生時代の主流でしたが、世界的にはアメリカと日本が中心の活動です。現在日本のESSではいくつかの要因から人気下がっている一方、日本語による「アカデミック」がある程度広まりました。IPの活動の一つのモデルとして特に重要な活動だと考えます。

「アカデミック」では、概ね1シーズン (半年) に1つの共通論題が発表されます。<sup>6</sup> その論題の枠内で肯定否定側の種々のケースを用意します。1チームは肯定否定両方を試合毎に交換して行うので両方の議論を準備します。資料調査は場合によっては数ヶ月におよび、一般的な書籍、新聞雑誌記事だけではなく、ある程度専門的な文献も当たります。他の活動もそうですが、直接英語の文献を読むよりは日本語の文献を読んで、資料を翻訳して英語のスピーチの中で使うということが多いです。それでも、たとえば私は、経済問題が論題のシーズンには、*Japan Times*のような一般的な英字紙を見るだけでなく、日経新聞の週間英字紙を定期購読していた記憶があります。

<sup>4</sup> ESSで行われているディスカッションはその後、後述のデイバートで発達した政策分析のモデルを導入しPDD (Policy Determining Discussion) という独自のスタイルを形成するようになりました。学生団体などから詳細な手引書が発行されています (たとえば、京都大学E.S.S. (1999a; 1999b))。

<sup>5</sup> デイバートのスタイルについての用語 (呼称) の混乱については、蓮見 (2001) がある程度整理しています。

<sup>6</sup> 当初は学生が運営する全国組織が策定作業をすべて行っていましたが、現在は広く会員を有する日本デイバート協会内の論題委員会において学生とデイバート指導者が協力して推薦論題を策定し、学生団体がそれを利用する形をとっています。

私が扱った論題のテーマは、以下のとおりでした。

- 1年後期 教科書検定制度（1年2年前期は京都大学ではディベート大会に参加しませんでした。）
- 2年後期 日中平和友好条約
- 3年前期 貿易障壁の撤廃
- 3年後期 原子力発電
- 4年前期 自衛隊の増強

（参考まで、2008年後期には大学生を中心とするディベート大会では日本語英語とも核燃料の再処理を論題としています。<sup>7)</sup>

当時は一つの論題について、複数の肯定否定のスピーチを準備するとともに、何十枚、何百枚となる引用カードを英語で準備し、カードボックスに整理して試合に臨みました。政治や経済の問題であれば、法学部や経済学部の図書館にも行き、原子力問題では安全性に関する論文などを見るために工学系の雑誌論文も読んだと思います。1978年後期の論題は、「原子力発電を廃止すべきである」でしたが、代替エネルギーが問題になりますので、主要な代替エネルギーの経済性、安全性、資源量なども調べます。また、安全管理体制などが問題になると政治的な分野の文献も読みます。こういった調査やいろいろな議論の作戦をチームメートと話しあうことを通じて、文学部英文科でしたが、種々の社会問題を勉強することになりました。

大会に向けてクラブ内で準備をし、1ヶ月程度は毎週末他大学のチームと練習試合を行い、大会に参加すると、土曜に予選2～4試合を行い、勝ち進めば日曜日に準々決勝、準決勝、決勝と進んでいきます。1チーム2人で1試合1時間半程度が現在主流の形式です。シーズン中に何十試合も行うことになります。

試合は英語で行われますが、資料調査の大部分や準備段階の作戦会議、試合中の作戦会議は日本語で行うのが通例です。これは、特殊な領域（domain）に限定した英語力の養成ともいえますし、このような活動を通して、アカデミックスキルを広く養成していると言っていいでしょう。

アカデミックディベートは日米の交流があり、私の場合は、来日したアメリカのディベートコーチと知り合った縁で（京都で1泊2日のワークショップがありました）、3年生の夏に3週間ほどマサチューセッツ州立大学で開かれたアメリカの高校生向けディベート合宿に参加するという「ミニ留学体験」をしました。

アメリカのディベート合宿では、高校生が数十人大学の寮に泊まり、大学の教員や学生・院生からディベートの理論（論題分析の方法など）や戦術についての講義と論題内容（このときはアメリカのエネルギー自立）についての講義を聴き、グループに分かれてコーチがついてディベートの準備をします。合宿の最後には大会があり、1時間強の試合を1日に4～6試合行います。私は見学ということで、試合には出場しませんでした。初心者の試合の審査員を教授やアメリカ人学生とともに務めるという経験をしました。

<sup>7)</sup> これまでの論題リストはInoue（1994）を元に更新中のものがWeb上で公開されています（日本ディベート協会（2008））。

ここで学んだことは多く、私のその後の進路にも影響を与えたと思います。また、ちょうど日本の後期の論題が原子力問題でしたので、この合宿で入手した豊富な資料の一部（原子力や代替エネルギーの安全性の議論が中心）を日本の大会で利用できるという直接の効果もありました。資料は引用カードという形態で蓄積されるとともに、当時アメリカではそれをさらに論点ごとに短い準備書面にしたBriefsというものを作成するのが主流になっていました。高校生でも上級チームはそういう書面を何百枚、大学生のチームになると千枚を超える量をファイリングして試合に臨みます。現在では、コンピューターを試合に持ち込んで、画面上で資料を読むこともあるようです。

アメリカの大学生のトップレベルのチームはシーズンごとに論題について修士論文にも匹敵する資料調査を行うといわれています。もちろん、チームで協力しての準備ですし、教員のディベート監督や大学院生のディベートコーチがつかますが、チームは学部生が課外活動として参加します。

英語面で言うと、私にとってこれが初めての海外渡航でしたが、ディベートについては講義もある程度理解でき、高校生の試合のメモを取って審査もできる程度に3週間であったわけですが、日常会話はそれほどうまくいかなかったのではないかと思います。ここでも領域を限定した偏った英語力をとりあえず身につけていたと思います。（もっとも、一人で飛行機を乗り継ぎ、帰りの便の予約などを現地ですることはどうにかできたのですが。）

#### 4.5. 演劇

演劇部の英語版です。学園祭の出し物程度から、外の劇場での公演もあります。私の場合は、大学1年生の秋ごろからESSの中で通常の活動に加えて公演を目指すグループを作り、1年生が役者、大道具製作などを兼ね、2年生が演出などを担当し、脚本の選定、台本読み、舞台稽古を経て2時間程度の公演を京都府立劇場という本格的な会場で行いました。主に1年生の春休みに毎日のように練習を行い、2年生になった5月頃に公演だったと思います。邦題『毒薬と老嬢』（*Arsenic and Old Lace*）という作品でしたが、グループで作品を完成させる過程は平坦ではなく、最後は感動へと昇華します。

ディベートやディスカッションのような調査分析能力を中心に訓練する活動の重要性はもちろんですが、暗誦や演劇のようなよりパフォーマンス性の強い活動を通して口頭での効果的なコミュニケーションに必要な能力（発声法やボディランゲージ）を訓練する必要も無視できません。京都大学のESS時代には他の主要な大学のESSと違い、セクションに分かれることなく多くの討論・演劇活動をすべて行ったことは、効果的なコミュニケーション能力（Rhetorical Communication Skills）を偏らずに訓練することに役立ったと思います。

### 5. 国際プログラムのためのカリキュラム案

英語による教養教育・学際教育という看板を掲げるIPのカリキュラムに、ESSという課外活動が一つのモデルを提供できるのではないかと考え、私の経験を文章化してみました。これを踏まえてIPのカリキュラムの一部と正課外活動を組み合わせたモデルの概略を示して見ます。<sup>8</sup> ESSのような

<sup>8</sup>ここに示す概要は、私がかつてあるIPの準備ワーキンググループの中で提案していたものを元にしていますが、現行の同様の作業とは直接関係しません。

課外活動の一部は、ボランティア活動やインターンシップ活動同様、その実績に応じて単位認定をするべきだと考えます。また、教員がより積極的に関与すれば、正課科目と課外活動を組み合わせた運営（co-curricular activities）も可能です。私は九州大学全学教育科目の一部として、「競技ディベート入門」、「議論法とディベート入門」、「Debating in English」のような科目を開講する中で、ディベートクラブやESSの学生に授業でディベート指導に協力してもらい、授業参加者の中から初心者のディベート大会に出場することを奨励したりして、正課と課外の協同の可能性を探っています。

### 5.1. IPEP（English Program）基礎、中級科目として

当初は教員指導の下、徐々に学生主体の活動に移すとして、英語学習グループのようなものを作り、授業時間で足りないドリル的なものを課外に行います。昼休みや放課後の活動でもいいでしょう。動機や士気の維持のための学習グループによる支えあいという意味もあります。

### 5.2. 討論活動・IPEP上級英語・コミュニケーションスキル

カリキュラムとしては、次のような科目を開くことができます。アメリカのSpeech/Communication Departmentをイメージしています。

- Introduction to Speech Communication
- Oral Interpretation
- Public Speaking
- Group Discussion
- Argumentation & Debate
- Parliamentary Debate（Extemporaneous Debate）
- Academic Debate（Research-based Debate）
- Drama（Theatrical Production）

正課の科目では講義を中心として、課外活動（演習）として発表や試合を目指した少人数の活動を行うことによって授業だけでは不足する演習時間を確保できるでしょう。

スピーチ、ディスカッション、ディベートなどの技法を学ぶことによって、クリティカルシンキングやアカデミックスキルの基礎、討論活動の理論的説明を得るとともに、準備を通じて資料調査や分析の訓練を行い、学期ごとに別テーマを設定すると、さまざまな問題を扱うことができます。専門分野の導入としても、たとえば原子力問題を扱えば、工学的内容、政策・政治的内容、倫理的内容、などいろいろなアプローチが含まれます。ディベートやディスカッションでは、開講期毎にテーマを変えれば同じ科目名の重複履修も可能になりますし、Discussion I、Discussion IIのように番号や記号を付して科目名を区別することも可能でしょう。

大会参加、試合の勝敗というのは、動機付けとして強く働きます。そういった競争活動について個人の好き嫌い向き不向きはあるでしょうし、勝利至上主義はスポーツ界同様の問題を生みますが、適切な指導の下に行えば大きな効果を発揮すると思います。

### 5.3. 集中講義・合宿・ミニ留学

私が学生時代に参加したような合宿を集中講義として大学で講師を招いて開講することも可能でしょうし、アメリカの大学などで日本人学生向けの合宿を設定することも可能でしょう。国際的に参加者を募集して実施されているワークショップもあります。即興型のディベートにおいても同じような講義と実践を組み合わせたワークショップがあり、これも大学で開くことも可能ですし、ヨーロッパやアジア諸国の既存のワークショップに参加したり、IP用合宿を設定したりすることも可能でしょう。一例として、2009年3月に1週間の集中講義形式のディベートワークショップを九州大学で開催しました。さらに、2010年1月には4日間の全学教育総合科目「英語ディベート集中訓練」として単位化したワークショップを開講しました。

## 6. おわりに

本稿では、近年各大学で取り組まれている英語を使用言語とした国際教養学部のようなプログラムのカリキュラム開発などの参考として、課外活動として長年の実績がある大学ESSの活動を紹介し、それに基づくカリキュラムの一部概略を提示しました。特に、カリキュラムの中心となりうる広い意味での討論活動（議論法）、つまり社会問題の調査・分析を基に説得的な英語コミュニケーション能力の訓練を行うアカデミック・ディベート活動について詳しく述べました。課外活動として公式のカリキュラム議論などからは取り残されてきたこの有益な活動に少しでも光を当てるとともに、まだまだ試行錯誤の段階にあると考えられる国際プログラムにおいて必要な内容の一端を示すことができればと思います。

一方、さらに未解決の問題の一つとして、英語を共通使用言語とするこのようなプログラムが常にはらむ問題—英語支配（英語覇権主義、英語帝国主義）の問題について若干の考えを次の補章で紹介します。

### 英語支配についての補章<sup>9</sup>

「英語は単なる道具にすぎないのか？」と問われれば、答えは様々でしょう。

「英語はシェークスピアをはじめとするすばらしい文化を持つ美しい言語である。その文化を熟知し、教養あるネイティブ・スピーカーのように読み書きできるのが目標。」

「そう、私は毎日仕事で使っている。必要な道具であって、それ以上でも以下でもない。」

「英語は世界共通語という名のもとに世界を支配しつつある。この英語帝国主義に対抗しなければならない。」

---

<sup>9</sup>この補章は、京都大学ESSの現役学生と卒業生向けの会報に筆者が寄稿した文章（井上、2004）に加筆修正したものです。

敢えて単純化を許していただくとして、それぞれ、英語愛好派、英語道具派、反英語支配派、と呼びましょう。英語愛好派は英国好きであったりアメリカ好きであったりもします。英語「命」を宣言し、いわゆる「ネイティブ」を目指して日夜研鑽に励みます。道具派は、使えばいいと割り切っています。「世界中の人たちと仕事をすればよくわかる。」「インド人も中国人もヨーロッパ大陸の人々も、それぞれの訛りで英語を使っている。」「日本人も日本人訛りの英語でも堂々と渡り合えばいいのだ。」このような声が聞こえてきます。反英語支配派は、英語帝国主義（覇権主義）に警鐘を鳴らします。<sup>10</sup>「英語が実質上の世界共通語として普及する中で、イギリスやアメリカの文化が世界を席捲している。」「英語の論理（話し方・書き方）が規範とされ、たとえば日本語は非論理的な言語と蔑まれる。」「発音や文法もいわゆるネイティブ・スピーカーが基準・目標とされると、いつまでたっても英語学習者は劣等感にさいなまれ、英米人からは子供扱いされる。」このような批判が行われています。

個人的な意見・趣味の範囲では、どのように考えようと自由でしょう。問題としたいのは、このような考えのいずれかが、言語政策や言語教育を通して「制度化」する場合です。明治以来の日本の英語研究・英語教育の「発展」を支えてきたのは、英語愛好派を中心とする「英学（英文学・英語学）」の伝統でした。中にはネイティブ・スピーカーよりも優れた英語の「達人」も現れたようです。ほとんどの日本人が実際に英語を使うことがない時代には、それはそれでよかったですでしょう。ところが、英語を道具として使う必要が多数の人に生じ英語学習が大衆化した今となつては、大学英文科を中心とする「英学」の伝統（英語教師を兼ねる英語研究者の再生産）は日本の学校において英語教育の足枷となっているのではないのでしょうか。

最近、英語道具派には追い風の世の中です。グローバル化だ何だと言って、政府も英語教育改革を後押ししてくれます。大学や企業ではTOEICなどの資格試験が大流行です。英語研究者の間でも、日本のような「外国語としての英語EFL」とインドやシンガポールのような「第2言語としての英語ESL」との区別は薄れ、日本語母語話者の英語も間違った「和製英語」と卑下するのではなく、英語の変種（Englishes）の一つだという主張もあります。まだまだ、その日本英語を実際に世界で認知してもらう努力は必要だが、いつまでもネイティブの影に萎縮している必要はない、日本文化を背負った日本英語を主張していこう、と道具派は唱えているようです。

ところが、このような道具的考え方にも危険が潜んでいる、と極端な反英語支配派は言います。道具と割り切ると言いながら、結局はいわゆるネイティブ・スピーカー、特に英米の白人が基準となり、英語を使うことで知らず知らずのうちに英語支配の構造に組み込まれているのだと言うのです。では、どうすればいいのでしょうか。英語を使わなければならないのでしょうか。現実には難しいところです。英語支配を批判する研究者の多くは大学の英語教師として給料をもらっています。世界に向けて英語支配への問題を発信するには、英語で発表しなければならないのです。万が一、反英語支配過激派が主流となると英語教育は立ち往生しかねません。せいぜい英語支配に支配される危険を常に認識しながら道具として使う、このあたりが現実的な道のように思えます。

<sup>10</sup> 反英語支配派の日本における主要論者の一人は津田幸男（津田、1990など）ですが、ここではその他の派の論点を含め、特定の文献に依存しているのではなく、井上の単純化した提示であることを断っておきます。また、いわゆる英語母語話者の中にも英語支配に批判的な論者は多く、Pennycook（2001）は代表的な著作です。

さて、ESSはどうでしょうか？かつて反英語支配派からは、ESSは英語愛好派の巣窟であり、まさに英語支配の片棒を担いでいると言われてきました（たとえば、ラミス（1976））。おそらく、ESSの中でも日本社会の変化に追随して、道具派が増えているのではないかと思います。ただ、そこでは無邪気な道具主義とネイティブ・スピーカーを基準とする「正しさ」が相まって、知らぬ間に英語に洗脳されているかもしれません。

一方、ESSは、幸か不幸か日本人同士で英語を使うというコミュニティーを作り出し、そこでは比較的独立し安定した「日本英語」という英語の正当変種を発達させる基盤となっています。英語愛好派にとっては愁うべき事態が、反英語派にとっては思いがけない朗報かもしれないのです。

英語という言語の問題だけでなく、ディベートのようなコミュニケーションの方法にも似たような問題が潜んでいます。ディベートのようなコミュニケーションの方法・意思決定方法が世界共通なのでしょうか。日本の伝統的なコミュニケーション方法（たとえば、延々と続く話し合いの末、暗黙の共通理解が得られる）はディベートなど「世界共通」の方法に取って代わられるべきなのでしょうか。「世界共通」はエリート層には共通でも、各文化の土着の（伝統的な）方法では必ずしもないでしょう。それでも国際的なビジネスや外交の舞台では、エリート層を相手にするなら日本人も「世界共通」を身に付けるべきなのでしょうか。ここでも無批判なディベート教育推進は要注意です。

社会で英語を使って活躍されている人たち（道具派の理系研究者を含め）からは、英語の教員は何を呑気なことを言っているのか、そんなことを言っているから学生の英語が上達しないのだと、御叱りを受けるかもしれません。しかし逆に、私は教育者・研究者の責務として、このような問題を考えていかなければならないと思っています。私自身、日本で英文科を卒業して中高の英語教師やアメリカ留学も経て、今は大学で英語やコミュニケーションを教えつつ、授業では英語支配の問題なども取り上げています—むしろ、悩みつづけていると言ったほうがいいでしょう。

また、学生たちにも、英語はただの道具と割り切っているのか、悩んでほしいと思います。あまり悩んで英語学習ができなくなならない程度でいいですから。ちょうど本稿執筆中の2009年1月10日に開催された（九州大学大学院言語文化研究院主催）英語プレゼンテーションコンテストにおいて、予選を通過した本選発表者の演題の一つが、“We are Dominated by English !”であったのは、皮肉であり警鐘であるとともに、学生たちが健全な批判精神を育てていることに安堵を覚えるものでありました。

## 参考文献

- Benson, T. W (Ed.). (1985). *Speech communication in the 20th century*. Carbondale, IL: Southern Illinois University Press.
- Inoue, N. (1994). *Ways of debating in Japan: Academic debate in English Speaking Societies*. Ph.D. Dissertation, University of Hawai'i. Ann Arbor, MI: UMI.
- Pennycook, A. (2001). *Critical applied linguistics: A critical introduction*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.
- 井上奈良彦. (2004). 「英語はただの道具ですか？」. 『comet』 第40号. 京都市：京都大学E.S.S.

- 近江誠. (1996). 『英語コミュニケーションの理論と実際－スピーチ学からの提言』. 東京：研究社.
- 京都大学E.S.S. (1999a). 『The Companion to Discussion, '99』. 京都市：京都大学E.S.S.
- 京都大学E.S.S. (1999b). 『The Companion to Discussion, '99: For the Advanced』. 京都市：京都大学E.S.S.
- クラーク, W.L. (1973). 『アメリカ口語教本 中級用』, 3訂版 (他). 東京：研究社.
- ジークミュラー, ジョージ W.・ケイ, ジャック. (2006). 『議論馱一探求と弁論 第3版』 (井上奈良彦(監訳)・九州大学言語コミュニケーション研究室(翻訳)). 福岡：花書院. (Ziegelmüller, G. W., & Kay, J. (1997). *Argumentation: Inquiry and advocacy* (3rd ed. ). Boston: Allyn and Bacon. の全訳)
- 津田幸男. (1990). 『英語支配の構造』. 東京：第三書館.
- 日本ディベート協会. (2008). 日本ディベート協会ホームページ. <http://japan-debate-association.org>.
- 蓮見二郎. (2001). 「What should we call the debate of N.A.F.A. ? ～ 『スタイル』 とは何か～」. 『Debate Forum』, 48号, pp. 31-51.
- 三熊祥文. (2003). 『英語スピーキング学習論－E.S.S. スピーチ実践の歴史的考察』. 東京：三修社.
- ラミス, ダグラス. (1976). 『イデオロギーとしての英会話』 (斎藤靖子 (訳)). 東京：晶文社.